



第44号

さらしな の 里

友の会だより



2021・春



堂の山の入口を示す標識石。千曲市桑原の高木眞さん制作のストーンアートで、堂の山にはフクロウなどさまざまに描かれた作品がところどころに置かれている

堂の山復活プロジェクト始動！

芝原区 大谷公人

更級地区にある里山・通称「堂の山」は、20年ほど前までは更級保育園児が、春を探しに散歩に来ていた（「友の会だより」第4号＝2001年春）。しかし、山の所有者の高齢化で手入れがされず荒れていき、保育園児も散歩に来なくなってしまう。「友の会だより」第4号の編集後記には「五月の初め、芽吹き始めた堂の山に行った。丸太橋をわたって坂を登って・・・までは小さいころの記憶と同じなのだが、お堂のある広場がなんだか息苦しい。大人になったからそう思うだけではないようだ。周りの下草が生い茂り広場を侵食している。芝原から登って広場に至る口にある鳥居付近は、ササに覆われほとんど歩けない。道祖神も埋没している」とその頃の荒れている様子を描写している。

私は昨年退職して、自由な時間をのんびりと生活していた。ある時堂の山を訪ね、荒れていた様子を見た。「保育園児が散歩コースとして何度も足を運んだり、大人が日々散歩を楽しんだりするような堂の山に復活させたい」そんな気持ちがいってきて、昨年10月5日、一人で整備を始めた。まず、祖父と父が山を開墾し段々畑を作ったものの、リング栽培をやめたときに木を切り、その後は低木とツタが茂る山に戻って荒れていた場所から始めた。1段目のやぶを刈り始めたがなかなか進まない。一人ではつらい。仲間の必要性を痛感し「堂の山復活プロジェクト2021」を立ち上げた。（3ページに続く）



今にも雨が降り出しそうな空模様の令和3年3月5日午前9時40分、小林司教頭先生と担任の中村孝子先生に引率された更級小学校の6年生25人が、さらしな里古代体験パークにやってきました。そう、今日は復元住居の屋根の葺き替え体験日です。今回使用する萱は、昨年11月、豊城巖会長はじめ4人の友の会役員に参加いただき、小雪舞う戸隠スキー場で刈り込み、トラック4台に積み込んで古代体験パークへ運び、乾燥させ保管しておいたものです。

児童の皆さんには保管場所から萱の束を運んでもらい、萱葺職

更級小6年生が縄文住居の屋根葺き替え体験

人に萱の葉の取り方やそろえ方、萱の縛り方などを教えていただきながら作業し、いよいよ葺き替え体験です。

直径10センチほどに束ねた萱を「グツ」と力を入れて差し込みます。一人ひとり指導を受けながら順番に差し込み、予定した終了時間を大幅に過ぎた午前11時30分、一部ではありますが、皆さんの協力で復元住居の屋根がきれいになりました。

昨年は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、縄文まつりが中止となってしまいましたのが中止となってしまいましたので、小学校生活の思い出の一つになればと、今回の萱の葺き替え体験を畑秀幸校長先生にご相談させていただきました。多くの行事を控えた年度末のお忙しい中、日程調整してくださり本当にありがとうございます。また、萱刈作業、葺き替え作業をお手伝いいただいた友の会役員の皆さま、ありがとうございます。

想像していた葺き替え体験とはだいぶ様子が違っていたかもしれませんが、今回の体験が小学校の思い出としていつまでも記憶に残り、子どもたちのこれからの人生に少しでもお役に立てることができたなら、とてもうれしいです。

(さらしなの里歴史資料館

学芸係長 寺島孝典)

リレイ
里麗エッセイ

鳥の葬式

美しい自然に囲まれた更級に住むようになって40年ほどになる。四季それぞれの良さがあるが、私はやはり早春が一番好きだ。家の後ろがすぐ山になっていて、春になるといろいろな野鳥の囀りを楽しむことができる。以前は今よりもっと多くの種類の鳥が来ていたように思う。その頃偶然に見た野鳥の珍しい行動を私は忘れられない。

ある日2階の窓からふと山との間の土地を見下ろすと、1カ所に十二、三羽くらいのいろいろな種類の野鳥が集まっているのだ。



高橋さんお気に入りのオオルリの親と雛の写真。ご主人のお知り合いの方が大池の森で撮影したもの

千曲市若宮 高橋良子

しかもみんな真ん中を向いて円を作っている。円の真ん中には1羽の茶色の鳥が死んでいた。まわりの囲んでいる鳥たちはじっとして真ん中の死んだ鳥を見ている。そのうちにまわりの鳥たちが時計回りに歩いてグルグル回り始めた。3回りぐらい、円を崩すことなく回ると1羽ずつ順序良く飛び去って行った。最後の1羽が飛び立つと後は死んだ鳥だけが残された。その様子はまるで儀式。種類を越えた鳥たちの葬式のように思えたものだ。

最近グーグルで「鳥の葬式」で調べてみた。するとなんと出ていた。カラス科の知能の高い鳥が、仲間の死を悼むというように、仲間を死に追いやった原因を見極めているらしいとのこと。ただ私が見た光景は大小さまざまな野鳥たちだ。もしかししたら私は非常に貴重な光景を目にしたのかもしれないとひそかに思っている。まだ、専門家に伺う機会には恵まれていない。



写真左＝新築されたときの飯縄社。堂の山から北方に見える飯縄山の神様を祭る。親しみを込めて「おいづなさん」と呼んできた。上＝飯縄社に向かう参道の鳥居。新築したときの神事



倒木などで荒れている参道



大谷公人さんの祖父・父が開墾、りんご畑だったところ。プロジェクトはここからスタート



手入れが行われ見通しがよくなった



堂の山復活プロジェクトに集まった人たち

飯綱社（おいづなさん）に続く表
近所の大工さんは「芝原側から、
どうれしかった。」

とはいつても、短期間で無理をして突き進んでも続かないので、無理をしない程度に活動し、長く続けることを目標にした。まず、千曲市在住の山好きの先輩と上田市で里山整備をしている知人に声をかけ、3人で整備作業を始めた。その後、小中学校の同窓生やそのつながりで知人を紹介してもらったりして仲間を増やした。SNSでこの活動を発信すると、「子ども頃は、毎日のように堂の山へ友達と出かけて行って、山を駆け回ったり化石を採ったりして楽しい思い出がたくさんあり、いろいろなことを学びました。ぜひ活動に参加させてください」という声が若者から届いた。涙が出るほどうれしかった。

（1ページから続く）



4月、上空からの様子。すっかりきれいに整備。季節の花も咲くようになった

参道の鳥居は、社を新築した当時、山に生えていたヒノキを使って自分分が造った。懐かしい」と話し、堂の山復活の取り組みを喜んでくれ、当時の写真を見せてくれた。
整備活動は毎週土曜日の午前中に定例化し、毎回10人ほどが集まるようになり、作業ははかどった。季節の花も整備をしたので見つかるようになった。5月1日には第1回のイベントとして、シイタケのこま打ち体験会を盛会に開催できた。地域の方が、お孫さんを連れてワラビ採りに来る姿も見られるようになった。堂の山が地域に愛される更級の里山として復活する姿を目指して、仲間と共に整備を続けていきたい。（大谷公人）

孝行と敬老の歌を毎春唱えて

羽尾の姨捨孝子観音祭

羽尾の郷嶺山（ごうりやま）の山頂にまつられて
いる姨捨孝子観音像の前で、毎年4
月に観音例大祭（たいさい）があります。奉賛会
の役員（会長は羽尾4・5区主務区
長）が祭りの準備をし、市民が参拝
に集まります。

この祭りの大きな特色は、祭式の
中で、孝子観音祭のために創作され

た御詠歌（ごえい）（姨捨孝子観音和讃（わさん））が唱
えられることです。年老いた母親を、
姨捨山に放置できずに連れ帰った孝
行息子の話と、年配者を大切にす
心を忘れない決意とを観音様の前で
唱えるのです。明徳寺御詠歌講の講
員（約15人）の皆さんによって毎年
唱えられています。写真（平成3年



〜つつしんで、唱え奉る姨捨孝子観音 ご和讃に。

- 一番 〽信濃の山は姨捨の、老婆を捨てし ものがたり。
- 二番 〽然れど孝養息子あり、温愛深きわが母を
- 三番 〽捨てるに忍びず連れ戻り、子の真心を尽くしたる。
- 四番 〽あるとき領主の難題に、住む人まどい哀れなる。
- 五番 〽その時、老婆難題を、解いて我が子に教えたる。
- 六番 〽領主は老婆と孝子たたえ、それより老人いとおしむ。
- 七番 〽更級の里に住む人が、これを伝えて今ここに、
- 八番 〽先祖の尊敬永久に、伝え渡さん観世音。
- 九番 〽南無や孝養の観世音、南無や大悲の観世音。

姨捨孝子 観音和讃

作詞：野田俊一
（上田市小泉 高仙寺住職＝当時）
曲：「西国霊場観音和讃」
の曲を原曲とする

ことばの解説Ⅱ「和讃（仏教歌謡（御詠歌といふ）の形式の一
つで七・五調が繰り返す歌詞にメロディ（曲）を付けたものを
特に和讃という。「孝養」親を大切にしてい、孝行すること。
孝養な子を孝子という。「観世音」観世音の略称が観音。世間
の音（苦しみの声）を観る（聴く）。「南無」古代インドの梵語
「ナム」が語源で、敬意を表すために体を折りまげることという。
現代インド語の挨拶「ナマス」に通じる。「大悲」この世に
生きる私たちのために、苦を引き受ける観音さまの徳性。

4月）のように左手に鈴（すず）を持ち、歌
に合せてそれを振って鳴らしなが
ら、仏教歌謡特有のメロディで奉納
します。歌の勘どころで全員が鈴を
振る、そのタイミングとリズムが一
致すると聴き手の心に響くのです。
観衆が聴き入っている中なので、間
違えないように鈴を振る歌い手に
とっては大変な緊張です。

今年コロナ禍で、役員さんさえ
参加人数を制限されましたので、講
員さんは参加できませんでした。私
一人で唱えさせてもらいました。私
も初体験なので緊張しました。
明徳寺に御詠歌講ができたのは第

1回の祭り（昭和36年4月）の半年
ほど前でした。新しく建立された孝
子観音のまえで御詠歌を奉納した
との願いからでした。羽尾には、御
詠歌の経験者は誰もいませんでし
た。御詠歌の先生を探し、孝子観音
の御詠歌を作っていたら、講員を
募集し、御詠歌の特訓をして、第1
回の祭りに間に合わせました。この
御詠歌講は、今では、さまざま
行事に、それにふさわしい御詠歌を習
得し奉納しています。

なお、姨捨孝子観音像が、著名な
彫刻家の作であることなど、建立の
いきさつに関しては「友の会だより」
12、16号、および「更級への旅」（さ
らしな堂）23、51、53、92号にあり
ます。いずれもネットで読むことが
できます。

また姨捨孝子観音像は、千曲市が
昨年認定された日本遺産を構成する
文化財の一つ、冠着神社遙拝所と同
じ敷地内にありますので、孝子観音
とその祭りも構成する文化財の一つ
として認知してほしいところです。

（羽尾4区 明徳寺住職・塚原弘昭）

編集後記 堂の山が遊び場だった人
にとって復活プロジェクトはビッグ
ニュース。石の芸術にめぐり合うの
も楽しみです▽高橋良子さんの「鳥
の葬式」は絵本になりそうです▽芽
吹き感たっぷり44号となりました。